

2.都市部における水害

雨の降り方が変化してきていることは前回述べました。雨の影響は洪水や浸水といった水の災害に現れます。ニュースで目にするのは、住宅地の坂道で、道路がまるで川のようになって濁流が流れ下る様子や、マンホールから水が吹き上げている様子です。住宅地で降った雨が道路の側溝に集まります。側溝にごみや落ち葉が詰まったり、そもそも側溝の容量が小さいなどの原因で流す水の量に対して側溝の能力が不足すると、集まってきた水を呑みきれなくなり、道路にあふれることとなります。道路は住宅地の中に無数に作られており、斜面の下方に向かう道路に水が集中します。道路の傾斜が急な場合、水の流れる速さもかなり早くなります。こうなると、足のくるぶしくらいの水深でも、歩くのは困難になります。実際、このようなところを歩いて恐怖を感じた人もいます。マンホールからの水の吹き上げも同様に、地下の排水溝の水が呑みきれずマンホールの上に向かって排水が起きたものです。豪雨の場合は、このような現象が起きることを想定して、避難の準備をすることが大切です。表面水があまり激しい場合は、避難所への移動はかえって危険なこととなります。事前に住んでいる町の地形や道路網、側溝の状況などを確認し、掃除など行っておくことは大事なことです。

台風や梅雨前線で雨が多量に降ることがあります。この時には、思わぬところで川が決壊したり、浸水することがあります。2015年9月、宮城県大崎市の南東に位置する渋井川では多田川との合流地点の上流側の左岸堤防3か所で決壊が発生し付近の新興住宅街と水田等が浸水しました。この原因は、多田川の水位が上昇して渋井川に逆流し、長時間水位が高い状態で堤防の浸透破壊が起きたのではないかとされています。同様の現象は左岸でも確認され、もっと水位が高い状態が継続すれば左岸でも決壊が起きていた可能性があるといわれます。実はこの近くに80年前の洪水を知らせる石碑があり、今回と同様の現象で洪水が起きたことを伝えていました【呉 修一ほか, 2016】。このような災害を伝える石碑は先人の苦労を後世に伝えようとするもので、同じ苦労を味合わせたくないということで、建立したものです。この付近は昔から浸水被害が何度も発生している、水害リスクの高い場所です。これらの情報を正しく受け継ぎ、住宅や資産を失わないようにしたいものです。なお、ここの住宅には、2011年3月の東日本大震災の津波で被災し海岸部から移住した人がいたそうです。海からの津波はありませんでしたが、今回は山からの洪水で被災されました。このようなことにならないよう、住宅の立地条件は地域の災害史とともに詳しく調べておく必要があります。